

芸術祭が始まる

東京藝術大学美術学部絵画科准教授
アーツ前橋チーフキュレーター

みやもと 武典
宮本 武典

⑤〈絵〉は「糸に会う」と書く

東京藝術大学油画専攻の研究活動として、桐生の重要伝統的建造物群保存地区をアートの視点でリサーチし、路地奥で眠っている元織物工場や蔵など、この地域に残る文化資源を活用した芸術祭を準備中です。リサーチには藝大の教員と学生20人が参加するほか、地元の桐生大学短期大学部アート・デザイン学科の授業とも連携し、総勢34人が有鄰館を起点に春から活動してきました。

芸術祭の本番は令和8年11月ですが、今期のリサーチの中間報告展を、9月13日(土)から2週間、有鄰館で開催します。芸術家やデザイナーの卵たちが、重伝建の景観に保存されている織都・桐生1000年の記憶をどのように捉え、表現したのか。市民の皆さんにぜひご覧いただければと思います。

その9月のリサーチ報告展に向けて、藝大生たちが続々と桐生入りし、作品のテーマや素材を探しています。3年生の中坪小鈴さんは、着物の帯などを夫婦二人で織る小さな工場を訪ねました。私が様子を見に行くと、彼女は経糸を織機にセットするご主人の

作業の脇で、熱心にメモをとっていました。

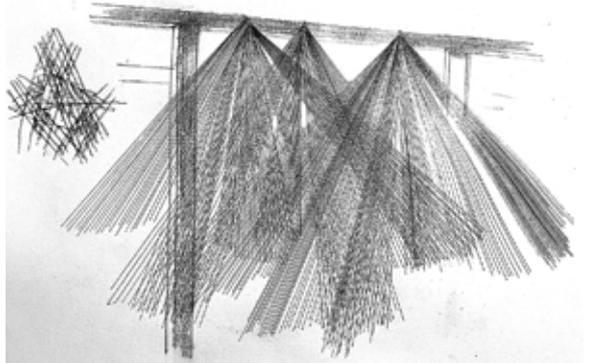


ジャガード織機をスケッチする藝大生

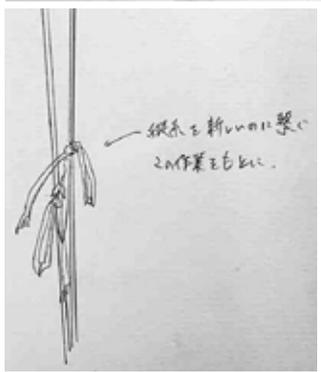
先日、本町六丁目のプラスアンカーで、学生の作品プラン発表会を行った際、中坪さんは、「経糸をセットするのは夫、緯糸を通すのは妻という男女の分担が印象的でした。桐生織物の伝統を今日まで織り成してきたのは、きっとこ

ういう家族や男女の協働のリリース。その結び目を私なりに表現してみたい。」と話してくれました。

彼女は岐阜県の高山出身で、実家は代々果樹農家を営んでいるそうです。「織物の取材なのに、祖父や父がよく整備している果樹園のことを思い出しました。」と彼女。長く美大で教え、たくさんの学生を見てきましたが、芸術的な感性も一代で突然花ひらくのではなく、世代を重ねて醸成されていくものだと思います。桐生のまちに保存されているものづくりの精神は、そうしたつながりへの気づきを若者たちに与えてくれるのです。



◀▲中坪さんのスケッチ



▼プラン発表会の様子



パチリいい顔 桐生っ子

市内に居住する3歳まで(申し込み時)の桐生っ子を募集します。

詳しくは、市ホームページをご確認ください。
問い合わせ = 魅力発信課 (☎46-1049)



うらの はる
浦野 陽瑠ちゃん
5か月
(広沢町五丁目)



もとしま まひろ
本島 蒔大ちゃん
3歳5か月
(新里町鶴ヶ谷)



みわ ゆいか
三輪 結香ちゃん
1歳11か月
(相生町二丁目)



しょうだ いつき
庄田 一稀ちゃん
2歳
(相生町五丁目)

広告